A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

21

トルストイ

復　活　　原　卓也訳

中央公論社

世界の文学　21　©1963

トルストイ

訳者　原　卓也

昭和38年 4 月12日初版発行
昭和44年 3 月20日30版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　求竜堂印刷株式会社
口絵印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話 (561) 5921(代)振替東京34

目次

復活　3
解説　502
年譜　520

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

復

活

マタイによる福音書第十八章
二そのとき、ペテロがイエスのもとにきて言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。七たびまでですか」。三イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」

マタイによる福音書第七章
三なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁(はり)を認めないのか。

ヨハネによる福音書第八章
七あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい。

ルカによる福音書第六章
四〇弟子はその師以上のものではないが、修業をつめば、みなその師のようになろう。

第一編

一

何十万もの人間が、ちっぽけな一つところに寄り集まって、自分たちのひしめきあっている土地を醜くそこねようとどんなに努め、その土地に何一つ育たぬように石を敷きつめ、芽をふく草を片っぱしから摘みとり、石炭や石油でくすぶらせ、木々を切り倒し、動物や鳥を残らず追い払ってみたところで、春は都会の中でさえやはり春だった。太陽に暖められると、草は生命をとりもどしてすくすくと育ち、根こそぎにされなかったところでさえあれば、並み木道の芝生はもとより、道路の敷石の間にまで、いたるところで緑に萌え、白樺やポプラや山桜も、香り高いねっとりとした葉をひろげ、菩提樹は今にもはちきれそうに若芽をふくらませた。烏や雀や鳩はいかにも春めいて嬉しげにはや巣作りをはじめ、蠅も陽光にぬくもりながら、壁のあたりで羽音を立てていた。植物も、鳥も、昆虫も、子供たちも、楽しそうだった。だが人々は――いい年をした大人たちは、相変わらず自分自身やお互い同士をだまし合い、苦しめ合うことをやめなかった。神聖で大切なのはこの春の朝でもなければ、あらゆる生物の幸福のために与えられた、神の世界のこの美しさ――平和と親睦と愛とに心を向けさせてくれるこの美しさでもなく、互いに相手を支配するためにみずから考えだしたものこそ、神聖で大切なのだ、と人々は思いこんでいた。

だから、県の刑務所の事務室でも、神聖で大切とみなされていたのは、すべての動物や人間に春の喜びと感動とが与えられているということではなく、本日、四月二十八日午前九時までに現在留置中の未決囚三名（女囚二名、男囚一名）を出廷させるようにという、印章と表題つきの書類を前の晩に受け取ったことであった。女囚の一人は主犯なので、別個に送りとどけなければならなかった。というわけで、この命令書にもとづいて、四月二十八日の午前八時、悪臭のたちこめる暗い女子監房の廊下へ、看守長がはいってきた。そのあとについて、袖にモールを縫い飾った上衣に、へりの青いバンドをしめ、白い髪をカールさせた、疲れきったような顔つきの女がはいってきた。これは女看守だった。

「マースロワを呼びますか？」廊下へ開くようになっている監房の戸口の一つへ、当直看守といっしょに歩みよ

りながら、彼女はたずねた。
看守は鉄の音をひびかせながら、錠をはずした。監房の扉を開け放すや、廊下よりもいっそう悪臭のしみこんだ空気が中からむんと吹きつけてきた。
「マースロワ、出廷！」と叫んで、看守はまた扉を細目にしめ、相手を待ち受けた。
刑務所の庭にまで、風が町に運んでくるさわやかな、すがすがしい野の空気がたちこめていた。だが、廊下には、糞尿やタールや腐敗物などの匂いのしみこんだ、チフスを思わせる、胸のむかつくような空気がよどみ、新しくはいってくる者をだれでも、けだるい、うら寂しい気分に引きこむのだ。庭からはいってきた女看守も、この悪臭になれていたにもかかわらず、そうした気分を味わった。廊下へはいりながら、不意に疲労をおぼえ、眠くなってきたのである。
監房の中からざわついた気配が聞こえてきた。女囚たちの話し声と、素足の音だ。
「早くしろ、おい、さっさと出てこんか、マースロワ！」看守長が監房の戸口からどなった。
二分ほどすると、白いジャケットと白いスカートの上に灰色の囚人衣をはおった、背の高くない、ひどく豊かに胸のもりあがった若い女が、きびきびした足どりで戸口から出てきて、軽やかに向きをかえ、看守のわきに並んで立った。女は麻の長靴下に囚人用の毛皮靴をはき、白いスカーフで頭を包んでいたが、その下から、小さな輪にカールした黒い髪を、明らかに効果を意識した上でのぞかせていた。女の顔全体が、長いこと陽の目を仰がずにすごした人にまま見かけるような、穴蔵の馬鈴薯の芽を思わせる、一種独特の白さだった。幅の広い小さな手も、囚人衣の大きな襟のかげから見えている白いむっちりした首も、同じような感じだった。その顔の中で、ことに肌のくすんだ白さに比して人の心を打つのは、いくらか腫れぼったくはあるが、きわめて生き生きとした、輝きのある真黒な目だった。片方の目はやや斜視ぎみだった。彼女は豊かな胸を突きだすようにして、身をまっすぐに起こしていた。廊下にでると、こころもち首をのけぞらせて、ひたと看守の目を見つめ、命じられればどんなことでもやってのけるといった心構えをみせて立ちどまった。看守がもう戸をしめようとしたとき、プラトークもかぶらぬ白髪頭の老婆の、蒼白い、口やかましそうな、皺だらけの顔が、中からひょいとのぞいた。しかし、看守が老婆の頭を扉で押っぺしたので、頭は消え去った。房内に女の笑い声がひびいた。マースロワも笑いだし、扉についている格子のはまった小さな窓をふり返った。老婆は向こう側から小窓にはりつき、かすれ声で言った。

「とにかく、よけいなことは口にするんじゃないよ。一つことだけ言い張ってりゃ、それでいいんだからね」
「そうね、一つことさえ言ってりゃ、今より悪くはならないものね」マースロワは首をふって言った。
「一つことに決まっとるじゃないか、二つあってたまるもんか」看守長が自分の頭のよさを信じきった、見くだすような口調で言った。「さ、ついてくるんだ、歩け！」
小窓に見えていた老婆の目が消えたので、マースロワは廊下の中央へ出て行き、小刻みな急ぎ足で看守長のあとにつづいた。二人は石の階段をおり、女子監房よりもさらに悪臭がひどく、騒がしい男子監房のわきを、どの扉の換気窓からものぞいている男囚たちの目に見送られて通りすぎ、事務室にはいった。そこにはもう銃を手にした護送兵が二人立っていた。部屋にすわっていた書記は、煙草の煙のしみついた書類を兵士の一人に渡し、女囚を指さして、「連れて行きな」と言った。兵士はアバタだらけの赤ら顔をした、ニジェゴーロッド出の百姓だったが、書類を外套の袖の折返しにしまうと、薄笑いを浮かべながら、頬骨の張ったチュワシ人の同僚に向かって、女囚のほうに片目をつぶってみせた。兵士たちと女囚は階段をおり、正面玄関に向かった。
正面玄関はくぐり戸があいていた。くぐり戸の敷居をまたいで外庭に出ると、兵士二人と女囚は刑務所の構内を出て、町なかの舗装道路の真中を歩いて行った。
辻馬車の御者や、店員、料理女、労働者、官吏などが立ちどまっては、好奇の目で女囚をじろじろと眺めた。中には、首をふって、『こんな羽目にまでおちこむなんて、よほど行ないがわるいんだな。俺たちのとは桁が違うんだ』などと考える者もいた。子供たちは女泥棒を恐ろしそうに見つめ、後ろに兵士たちがついている以上、あの女ももう何一つできないのだと知って、やっと安心するのだった。炭を売ったあと、居酒屋でお茶をたっぷり飲んできた一人の田舎者の百姓が、彼女に歩みより、十字を切って、一カペイカを手渡した。女囚は赤くなって一礼し、何やらつぶやいた。
自分に注がれている人々の視線を感ずると、女囚は首をまわさずにさりげなく、自分を見つめている人々に横目を走らせた。みなが自分に注意を向けているので、嬉しくなった。刑務所内にくらべて清らかな春の大気も、彼女を喜ばせたが、歩くことを久しく忘れたうえに、不格好な囚人用の皮靴をはいた足で石の上を踏んで行くのはつらかった。粉屋のわきにさしかかると、今までだれからも害を加えられたことのない鳩が何羽か、左右に身を揺りながら店の前を歩きまわっていたが、女囚はあやうくその一羽を踏みつけそうになった。鳩はさっと飛び立ち、羽をふるわせ、羽風をあびせて、女囚のすぐ耳も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

とを飛びすぎた。女囚はほほえんだが、やがて自分の立場を思いだし、重い溜息をついた。

二

女囚マースロワの来歴はごくありきたりのものだった。マースロワは、お屋敷奉公をしている、ひとり者の農奴女の娘だった。女は、姉妹二人の女地主の持ち村で、家畜番をしている母親と暮らしていた。ひとり者のくせに女は毎年子供を生んだ。そして、たいていどこの村でもやっているように、洗礼だけは受けさせておいて、そのあと、欲しくもないのに生まれてきて、仕事の妨げばかりする、要りもせぬ子供に母親が乳をやらないので、子供はじきに飢え死にしてしまうのだった。

こうして五人の子供が死んだ。五人とも洗礼だけは受けたものの、そのあと乳を与えられずに、死んでいったのだ。旅まわりのジプシーとのあいだにもうけた六人目の赤ん坊は、女の子だった。この子の運命もまったく同じものになるはずだったが、たまたま、オールド・ミスの二人の女地主の片方が、牛くさいクリームに対して家畜番に小言を言うために、家畜小屋に立ち寄った。家畜小屋には、可愛らしい丈夫そうな赤ん坊を抱いた産婦が寝ていた。オールド・ミスはクリームの件と、産婦を家畜小屋へなど入れたことに対して小言をならべたあと、もう帰ろうとしかけたころになって、赤ん坊をのぞき、同情心をそそられて、洗礼母になることをみずから買ってでた。彼女は女の子に洗礼を受けさせてもやったし、さらにそのあと、自分の名づけ子に対するいとしさが増すにつれ、ミルクを与えたり、母親に金をやったりしたので、女の子は生き長らえることができた。二人のオールド・ミスはそのまま少女を《スパショーンナヤ》（救われた娘という意味）とよぶことにした。

子供が三つになった年に、母親が病みついて死んだ。家畜番をしている祖母には孫娘が足手まといだったので、二人のオールド・ミスはその子を引き取ってやった。黒い目をした女の子はずばぬけて丈夫で、可愛らしく、オールド・ミスたちも大いに心をなぐさめられた。

オールド・ミスは二人姉妹で、妹のほうが気立てもやさしく、ソフィヤ・イワーノヴナといった。女の子に洗礼を受けさせたのも彼女だった。姉のほうは口やかましく、マリヤ・イワーノヴナという名だった。ソフィヤ・イワーノヴナは少女におしゃれをさせたり、読書を教えたりして、いずれは養女にするつもりでいた。しかし、マリヤ・イワーノヴナは日ごろから、この子を働き者の、立派な小間使に仕立てなければと話していたので、しつけがきびしく、機嫌のわるい時には叱りとばし、打ちすえることさえあった。こうして二通りの影響にはさまれ

て育ったために、少女は長ずるにつれて、半ば小間使、半ば養女といった存在になった。呼び名もカーチカ（卑称）とかカーチェニカ（愛称）とかではなく、その中間のカチューシャにおちついた。彼女は針仕事をしたり、部屋の掃除をしたり、聖像を石灰の粉でみがいたり、コーヒーを煎って挽いて出したり、こまかいものの洗濯をしたりするかたわら、時おりはオールド・ミスたちと同席して、本を読んできかせたりもした。

縁談もいくつか持ちこまれたが、彼女はだれとも結婚する気はなかった。お屋敷暮らしの楽しさに甘やかされた自分には、縁談の対象である勤労階級の人たちとの生活はむずかしいだろう、と感じたからだ。

十六の年までこういう生活がつづいた。満十六になった時、女主人のところへ、甥にあたる大学生の、裕福な公爵が遊びにきた。カチューシャは、その青年にはもちろん、自分の心にさえ打ちあける勇気もないまま、彼を好きになった。その後二年たって、ほかならぬその青年が、出征の途中、叔母たちのところへ立ちより、四日間そこで過ごしたことがあったが、出発の前夜、青年はカチューシャをものにし、別れの日に百ルーブル札を一枚彼女につかませて、旅立ってしまった。出発後五ヵ月して、彼女は彼の子を宿したことを明確に知ったのだった。

それ以来、彼女はすべてに嫌気がさし、どうしたら自分を待ち受けている恥からのがれられるかと、そればかり思い悩み、女主人へのお勤めにも身がはいらなくなり、なげやりになったばかりでなく、自分でもどうしてそんなことが起こったのかわからぬうちに、突然かんしゃくを起こした。あとになって自分でもしみじみ後悔はしたものの、とにかく女主人に荒っぽい啖呵を切り、暇をくれと申しでたのである。

主人のほうも彼女には不満だらけだったので、早速くびにした。家を出ると彼女はさる地方警察署長のところへ小間使として勤めたが、そこにも三月しかいられなかった。それというのも、警察署長が五十づらをさげた年寄りのくせに、彼女にモーションをかけはじめ、ある日、特にしつこく言い寄ってきた時に、ついかっとなって、ばかだの、ひひ爺だのと毒づいたあげく、胸を力まかせに突きとばして、突きころがしてしまったからだった。彼女は乱暴をはたらいたという理由で、お払い箱になってしまった。いまさら勤めてもはじまらないし、もうじきお産もしなければならなかったので、彼女は村で酒の商いをやっている後家の産婆の家に住むことにした。お産は軽かった。が、村にいる病身の女のお産を扱った産婆が、カチューシャに産褥熱を感染させたため、生まれた男の子は養育院へ送られてしまった。連れて行った老婆の話では、その子は着いてすぐ死んでしまったという

ことだった。

産婆のところに住むようになった時、カチューシャの持っていた金は全部で百二十七ルーブルだった。二十七ルーブルは働いてためた金であり、百ルーブルは彼女をもてあそんだ公爵のくれた金だった。ところが、産婆の家を出た時、手もとにはたったの六ルーブルしか残っていなかった。彼女は金を貯えておくことができず、自分のことにも派手に使うし、頼まれればだれにでも貸してやるたちだった。産婆が二ヵ月分の下宿代として、食費やお茶代を四十ルーブル取ったほか、子供を養育院へ送るのに二十五ルーブルかかり、さらに産婆が雌牛を買うのに四十ルーブル借りて行き、衣服代やら、みやげ物やらに二十ルーブル近くが何となく消えてしまったので、すっかり健康をとりもどした時には、金の持合せがなく、勤め口を捜さなければならなかった。さる林務官の家に口があった。林務官は妻帯者だったが、例の警察署長とまったく同じことで、行ったその日からカチューシャに言い寄りはじめた。カチューシャにはこの男が鼻持ちならぬほどうとましかったので、努めて避けるようにしていた。しかし、男のほうが経験もずっと豊かだし、老獪でもあるうえ、何よりの強味は、主人なので彼女をどこへなりと好きなところへ使いにだせるため、チャンスを待ちうけて、ついに彼女を射おとしてしまった。妻がそれに感づき、ある日、夫とカチューシャが一つ部屋にいるところへ踏みこみ、彼女に殴りかかった。カチューシャもおめおめと打たれはせず、喧嘩がはじまり、あげくのはては、給料も払ってもらえずに追いだされた。そこでカチューシャは町へ行き、伯母のもとに身をよせた。伯母の夫は製本屋で、以前は羽振りがよかったのだが、今ではお得意をみんな失って、酒にひたり手あたりしだいに何もかも酒にかえてしまっていた。

伯母は小さな洗濯屋をやっており、そのみいりで自分と子供たちとの生活をまかない、身を持ちくずした夫を支えていた。伯母はカチューシャに店の洗濯女になるようすすめた。しかし、伯母のところで暮らしている洗濯女たちの苦しい生活を目のあたりに見ていると、つい二の足を踏むようになり、職業安定所で女中の口をさがし求めた。やがて、中学生の息子二人と暮らしている奥さんのところに勤め口が見つかった。勤めて一週間ほどすると、中学六年（わが国の中学と高校を合わせたようなもの）になる、うすらひげの生えた、上の息子が、勉強など放りだして、カチューシャを口説きにかかり、心の安まる暇もなかった。母親はすべてカチューシャがわるいときめつけて、くびにした。新しい奉公先は見つからなかったが、たまたまある日、女中の口を世話してくれる職業安定所に行ったカチューシャは、そこで、むっちりした、あらわな両の腕に、

指輪や腕輪をいくつも飾りたてた上品な婦人に出会った。その婦人は、勤め口を捜しているカチューシャの境遇を聞くと、自分のアドレスを教え、遊びにくるよう招いた。カチューシャはたずねて行った。婦人は愛想よく迎え、ピロシキやら甘いぶどう酒やらをご馳走し、自分のとこの小間使に手紙を持たせて、どこかへ走らせた。夕方になると、白髪まじりの長髪に、白い顎ひげを生やした、長身の男が部屋にはいってきた。その老人は早速カチューシャのそばに腰をおろし、相好をくずし、目を輝かせながら、彼女をしさいに眺めまわしたり、からかったりしはじめた。主婦が男を別室へよんだ。カチューシャには、ぽっと出のウブな娘よ、などと主婦の話しているのが聞こえた。やがて主婦が今度はカチューシャを呼びだし、あの人は作家でたいへんなお金持だから、あの人の気に入りさえすれば、何一つ惜しがらずにくださるわ、と言った。彼女は気に入られたとみえ、作家はこまめに会うことを約束して、二十五ルーブルくれた。この金は伯母への借り分を払ったり、新しい服や帽子やリボンを買ったりして、あっという間に消えてしまった。四、五日すると、作家がまた彼女を迎えに使いをよこした。彼女は出かけて行った。作家はまた二十五ルーブル与え、独立した住居に移るようすすめた。

作家の借りてくれた部屋に暮らしているうちに、カチューシャは同じ庭内に住む陽気な店員と仲よくなった。彼女はそのことを自分から作家に告げて、小さいながらも独立した別の住居に移った。ところがその店員は、結婚の約束をしておきながら、どうやら彼女を振ったらしく、一言も言いおかずに、ニージニイへ行ってしまい、彼女はただ一人とり残された。カチューシャはその住居でひとり暮らしをして行くつもりだったが、それは許されぬことだった。警察の分署長も、黄色い鑑札（売春婦の鑑札）をもらって検診を受けなければ、そういう生活はできないと、申し渡した。そこで彼女はまた伯母のところへ行った。ニューモードの服をまとい、ケープや帽子でめかしこんだ彼女を見ると、伯母は尊敬の色をみせて迎え、この子も今では上流の生活をするようになったのだと思いこんで、もう洗濯女になれとすすめる勇気もなかった。また、カチューシャにしても、洗濯女になるか、ならないかということなど、今となっては問題にもならなかった。細っこい腕をした、蒼白い洗濯女たちが、店のとつつきの部屋で送っている牢獄のような生活を見て、現在の彼女は心から同情した。女たちの何人かはもう結核にかかっているというのに、夏冬窓をあけ放したままの部屋で、三十度もある石鹸くさい湯気に包まれながら、洗濯をしたり、アイロンをかけたりしているのだ。自分もこんな牢獄の暮らしにおちこみかねなかったのだと考え

て、彼女はおぞけをふるった。
一人も旦那が見つからぬため、特に金につまっていた、まさにこの時、女郎屋に娘を世話して歩く女衒がカチューシャをたずねあてた。
カチューシャはもうだいぶ前から煙草を知っていたが、例の店員との関係の終りごろや、捨てられたあとでは、しだいに酒におぼれるようになっていた。酒にひきつけられたのは、単においしいような気がしたためばかりではなく、それにもまして酒が、これまで自分のなめてきた苦しい思いをすべて忘れさせてくれ、酒なしには味わえぬ解放感と、自己の価値に対する自信とを与えてくれるからだった。酒がない時の彼女はいつも、気がめいり、わが身を恥じていた。
女衒は伯母のために大番ふるまいをし、カチューシャにも好きなだけ飲ませた上で、この町きっての大きな上店へ出るようにすすめ、その境遇のありとあらゆる利益や恩典をならべたてた。カチューシャは選択を迫られた。一方は屈辱的な女中の境涯であり、男たちの口説きや、人目を忍ぶかりそめの情事がついてまわるにちがいなかった。もう一方は、生活の保証されている、落ち着いた、だれはばかることのない境遇と、法律で認められ、十二分の報酬のもらえる、永続的な大びらの情事であった。彼女は後者を選んだ。そればかりではなく、その道を選ぶことによって彼女は、自分を堕落させるきっかけを作った青年にも、例の店員にも、そのほか自分に苦い思いを味わわせた人たちすべてに、復讐しようと考えたのだった。が、この場合、彼女の心をそそり、最終的な決心をかためる理由の一つとなったのは、ビロードだろうと、デシンだろうと、絹だろうと、腕や肩をあらわにみせたイヴニング・ドレスだろうと、どんな服でも思いのままに誂えることができるという、女衒の言葉だった。黒いビロードのアクセサリーを飾った、明るい黄色の絹のデコルテ・ドレスに身を包んだ自分の姿を想像しただけで、彼女は矢も楯もたまらなくなり、パスポートを渡してしまった。女衒はその晩のうちに馬車をやとって、キターエワという女の経営する有名な店へ彼女を連れて行った。
その日から、カチューシャにとって、神と人との戒律に反する慢性的な罪の生活がはじまった。それは、国民の福祉に心をくだく政府当局の許可ばかりではなく、庇護さえ受けて、何十万もの女たちの営んでいる生活であり、彼女ら十人のうち九人までにとって、苦しい病や、早老や早死にで終りを告げる生活だった。
深夜の狂宴のあと、朝から昼すぎまで重苦しい眠りに沈む。二時すぎ、三時すぎになって、けがらわしい寝床から、けだるく起きだし、酔いざましの鉱水やコーヒーを飲み、化粧衣やジャケットやガウンのまま、部屋から

部屋へものうげに歩きまわり、窓のカーテンのかげから外を眺め、生気のない声で朋輩同士ののしり合ったりする。それから、おもむろに顔を洗い、お化粧し、身体や髪に香水をふりかけ、服の仮縫いをし、それがもとでマダムとやり合い、鏡と睨めくらで顔を作り、眉を描き、脂っこい贅沢な食事をとる。そのあと、肌もあらわな、けばけばしい絹のドレスに身を包み、まばゆいばかりに明りをともして一面に飾りたてたホールに出てゆく。客がやってくる。音楽、ダンス、キャンデー、酒、煙草。そのあとは、青年や、中年男、半分子供の未成年者、もうろくしかけた年寄り、独身者、妻帯者、商人、店員、アルメニア人、ユダヤ人、タタール人、金持、貧乏人、健康人、病人、酔っぱらい、しらふの男、がさつ者、やさしい男、軍人、文官、大学生、中学生など、ありとあらゆる階層、年齢、性格の男たちを相手の性交渉だ。どなり声もあれば、冗談もあり、喧嘩も音楽も、煙草も酒も、酒も煙草もあり、夕方から夜明けまで音楽が鳴りつづける。朝になってやっと解放され、重苦しい眠りにつく。これが一週間ぶっ通しに毎日つづくのだ。週末には、国家施設である地区警察署に行く。そこでは公務員たる役人や医師など、男どもが時にはまじめくさって厳格に、時にはからかいづらの陽気な態度で、罪を防ぐために自然が人間だけではなく動物にまで賦与してくれた羞恥心を踏みにじりながら、これらの女たちを検診し、彼女たちが一週間にわたって共犯者たちと行なってきた罪悪をさらに今後つづけて行くための鑑札を交付するのだった。こうしてまた、同じような一週間がつづく。夏でも冬でも、平日でも休祭日でも、毎日毎日こうしたことの連続なのだ。

カチューシャはそんな生活を七年も送ってきた。その間に店を二度かえ、病院に一度はいった。女郎屋づとめをしてから七年目、最初の堕落から数えて八年目の彼女が二十六になった年に、今度の事件が起こり、そのために投獄されて、人殺しや盗人たちと一つ牢で六ヵ月も暮らしたあと、今やっと法廷にひかれて行くところだった。

三

長い道のりに疲れ果てたカチューシャが、護送兵たちとともに地方裁判所の建物に近づいたころ、彼女の養ない親の甥で、彼女の堕落のきっかけを作った、ほかならぬドミートリイ・イワーノウィチ・ネフリュードフ公爵は、スプリングのよくきいた、背の高い、寝乱れた自分のベッドに、羽根布団をかけていまだに横たわり、アイロンのひだを胸にとどめた、オランダ製のこざっぱりしたパジャマの襟をはだけて、煙草を吸っていた。一点に目をこらしたまま前方を見つめながら、今日しなければ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo